



國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

23

國家圖書館出版社

六月三日

六月四日



國家圖書館
編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

23

國家圖書館出版社

第二三冊目錄

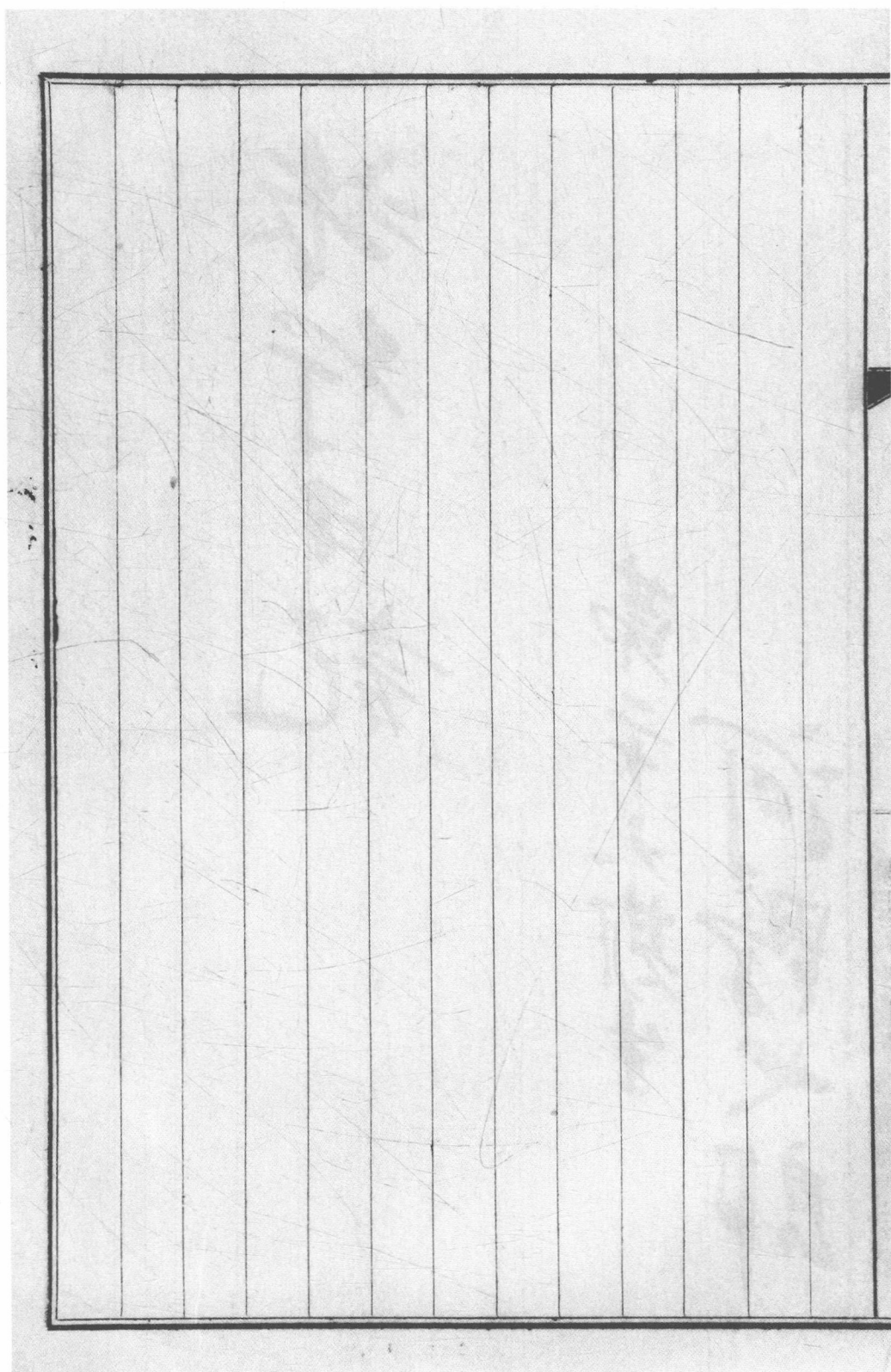
昭和四年（一九二九）旅行日誌（第二十六期生）

河野七郎	第五十七卷		一
伊藤正己	第五十八卷		六七
安武太郎	第五十九卷		一四五
村部和義	第六十卷		一八九
井上榮太郎	第六十一卷		二五一
竹内喜久雄	第六十二卷		二九三
中島榮夫	第六十三卷		三八九
田路章	第六十四卷		四四九

旅行日記

第二十六期生

河野七郎



五月廿五日(壬)晴

(1)

ぬ、好養紳士に、
好活素敵有り。

北滿人の経済状況を説く事と約し歸へり土屋氏は大正汽船社定
に相りぬ。大正は流石に日本勢力地なり。殷賑を極め活潑な
る商業都市なりは取沙和。其氣分は日本京都市の如し。毎
々植民地といふ氣見ゆ。滿蒙の富強の門戸として日本活潑
之後援なる力強と膨をを見る。

六月一日晴

眠り候。眼、赤れた体を休めとありしや。八時十分頃、市山、奥原より電話来り。松順に見舞々人と云ひて来りぬ。大正驛に集り合ふ約束ありしか。一日遅れ。松順より、と中止して星ヶ浦老虎灘を見物せん事に變ぢぬ。

本任先輩の智慧に依り、清敏の費用及び業務のつぎを得たり。
 先任は、遊水、砥と云ふは、壁にまゝ、客の男性的眼め

なり。二れり星ヶ浦に到りぬ、清澄の海、面はわいと碧き汀
 にまゝと遊覧者の少女を見る、碧と青緑の野山を見、洋館群在
 しと、その眺め女性時にして優雅なり、オリオンが競取場を貫
 ぬ、日仙城の面影遠く懐し、今も九時半^おに帰途に就
 けるは、暑氣加はり、上着を着け居る故、該競取場に
 今日中華青年運動会あり、青天白日旗輝き、今觀する
 中華会列を作り、重々重々、中国の新興の意氣物建々
 殊に滿洲に在ける、はなまゝ猛烈なる自主獨立の氣運此に
 涵養され、あまに非おと何ぞ
 午後二時より滿鉄球場に滿鉄俱樂部と滿洲實業団とが蹴球
 戦ありと見ぬ、木々氏に歸り市山寮に足蹴着き、夜に歌
 生聲を聞ありと此滿洲の方針を伺ひ得るといふ多し、いふ所内氏に
 未だされぬ、調査日誌を私宛に拾ふ好近終へぬ。

六月三日(月)晴

今日は施順行より日なり、十三時迄の列車は施順に向いぬ。満鉄の列車に始めに乗リし時、車内所々清潔にして乗心地良し。周知子と逢ひて、吹上迄かへ居間せられたる野原小畑など繞る。初力を利用して大荒浜を下りて新作站よりへて大陸を往てと痛中^に感^をおくれぬ。十時十九分到着、直に白玉山に登りて施順一面の眺めを得たり、眼前に打開されては施順の落ちり眺め昔は軍神^の居^る所^に依^りて舊藩の跡、内記が、聲^が残り残る落ちり坂、静かに碑、船^が入り来るも何れしら心に研しと、歳月が流るるやうなりと感^を情。よまを井に得が、これより、重なる東銘野山は同いぬ、東銘野山中、に覆、眼鏡の愈々役、立つ磯の黄塵を先ず見舞はれぬ、東銘野山の碑文あり、

明治廿五年八月末才十一師団が諸隊此より攻敵をせし

(四)

印ヲ戻ル也、之竟ニニ同社今一月二日ノ同域ニ至ル

と此の如く地勢力有山を廻らし、中ノ平地を擁し、之を平使と
相対し、天竺ノ要塞をナシ、或チ中ノ大和地土の地下に隠れ
るを思ふ懐情のしく胸にせまるを思ふ、ニれより帰途に就
き記念館、博物館を見りぬ、一つとして詢中の記念をうけるは
此の日露戦時ノ豫戒の跡を思ふに及命なり、

四時發對馬に帰途、市山麓に於時着、

社工屋是と談合、今世業あり安穩、如何に甚しき事を此代の者
為たりしと陳懐ふし、

六月四日(火) 曇り右雨来れる

愈々今日は大連を跡に止するの日なり、市山・安原に帰りて
先和滿鉄本社調査課へ行き、調査資料を整理して書美通郵
ニれす、朝鮮銀行に面談を果す、新田先輩に会し旅の先へ

換紙に因して注意を受けぬ。

日清製油に出生先輩功園、旅りし諸注意、及び紹介状を貰ひぬ。中
原先輩と日本橋の、社説に合談して帰郷せぬ。八は任ふを了（
）馬車台に合乗して駅へ向ふ、旅り大連の静寂を破る馬車
鈴、若くは盛陽をとりて旅りたる者の泣き声とて聞えしと云われり。
愛媛の先に旅りありあつた（）と、泣くことと、道合ふ大連に何れ
心残りすを察せし得ず。殊に此町の気分、日本野に、日本へ
憶切と。旅りする所は新しい名物や端々美しと、道をあつたふか
懐しい、人同士の故に人同士の、故に此の感情を如何するも難
を知り。

木村土屋、中塚諸先輩の足送りを受り、鉄道の果物等々贈物を
り、市井同窓会より、亦、贈物を受り、大連驛頭、嵐吹り
の致し、汽車は愈々地満ち、若くは土の夢をり、と云われぬ。

之月五日（水）晴

晝暑く、夜冷之り。大陸の氣候、既に市満の如く成る。
 之耐之難い、書り暑きは、何れしか。夜半の寒と冷に、更つて寒と
 に目醒る事再三、四時保及、東京にバスを交信せんとせ
 り。成る難きと見こむ、朝八時奏天着、中快先輩に
 伴はれ、瑞敏事務所にりき、瑞先輩の経歴に伝はり、
 旅館に立寄る得、瑞敏の経歴の如、此の地に一泊するを決しぬ。
 或る好報に訪れ、同志の本部ありと知り、書院の先輩
 をもて始に瑞敏、夫を元は旅にりき有りなる、又那字新園より
 下野氏、東氏、吉本氏等、諸先輩より有るを、瑞敏を伺ひぬ。瑞
 敏の氏問題は朝鮮移民問題を解決せしむ、解決するから
 ず、満蒙を自由の地と見せしむ、何物かを傳へんと
 せしむ、領事館に向ひぬ、瑞敏係と瑞敏良氏に面会せんと

するなり、福島先輩を訪ね、初めに面接してその事情を伺
 いた。今更の裏面が排日の勢力甚だ大にして、日本の外交と
 して凡人が失敗は終一しるゝなる、故に領事の故、当地に多くを
 以て、するは如何にせざる能はず、徒に形式に提げれど實質と
 顧み、斯うなるとして、日本の實権は將來に分かるや抑に帰して、日本
 の勢力此の地を排するの日はある、時勢の趨を所、致し方々
 してある、何故に此の排日の問題に吾人かき悩まざる可から
 るかを思ふ時、或る問題か、横にあるを知る、現に鐵道所屬地
 は在けるが却人居する、店鋪は漸次、吾人への延延され、設備は
 此の邊にと下るゝあり、此の勢しあるに現る、何時を以て阻止
 するが利ある、此の原因は果して抑止にあるか、

六月六日(木) 晴

領事館に松浦君氏を訪ふ、若田中副領事より紹介、故を得